

# 外来語の標準化に関する一考察

## —最近の外来語多用化の分析—

오 수 문\*

(e-mail : wsoo@daegu.ac.kr)

### <目次>

- |                |                     |
|----------------|---------------------|
| 1. 序論          | 2.4. 和製英語の発達        |
| 2. 日本語における外来語  | 2.5. 略字によるアルファベット表記 |
| 2.1. 発音の変化     | 3. 外来語の日本語における分布    |
| 2.2. 形態の変化     | 4. 複合語の中の外来語        |
| 2.3. 外来語の文法的特徴 | 5. 結び               |

キーワード：外来語 (a loan word)、カタカナ語 (KATAKANA word)、混種語 (hybrid)、アルファベット表記 (Alphabetical notation)、対照研究(contrastive study)

## 1. 序論

外来語<sup>1)</sup>はその名の通り、日本国外から入って来た語が日本語化したものである。その意味からすれば、漢語も外来語であると言える。しかし、漢語の場合は歴史の長さから既に外来語としての扱いは受けていない。このようなことから現在において外来語というのは、ほとんどの場合、西洋からの語彙を指す。最近、日本では非常に多くの外来語の使用が見られ乱用されている。国民に説明の義務を持ち、成人ならば誰が聞いても理解できるように話さなければならない政治家の話から引用すると、マニフェストから始まり、コンセプトなどは当たり前、クールビズ、ダイバーシティ、セーフシティ、スマートシティ、地下水モニタリング、ソーシャルファーム、ワイズペンディング、サステイナブル、ソフトレガシー、コンセンサスなどの語彙が使用されている。また、新聞記事にもよく使用されるアジェンダ、インフルエンサー、エビデンス、リノベーションなど、カタカナ用語に対し枚挙に暇がな

\* 大邱大学、助教授、語彙論

1) 本稿では外国から入ってきたものを外来語とし、海外に存在しない語彙をカタカナ語とする。

い。

新聞にしても専門家が読むものでもなく、一般市民に向けて書かれているものである以上、誰が読んでも「意味が分からない」では困る。ここ最近新聞の紙面を騒がせたワンオペなどの表記がある。ワン・オペレーションの略で、「一人で店を回す」という意味だが、省略までしてしまい知らなければ何のことだか理解できない。また、これは若い世代でのことで、全世代という訳ではないが、SNSなどで屢々使用される「group chat」は、グループチャットを省略して、「ぐるちゃ」として用いられている。外来語をカタカナで表記すらしよとしないようなものまであるのである。

このように過去に外来語が浸透するのとは違う様相を見せているのは、敢えて外来語表記しなくてもいいようなものまで含まれている点である。過去には相対的に見て、日本語表記が難しいと思われる語彙が、ある意味仕方なく原語のカタカナ表記化が行われることはあっても、現在のような類義語のような扱いは少なかった。上記の例でみれば、コンセンサスは合意、サステイナブルは維持とすれば良いにも関わらず好んで使用されるのは、外来語を多用することで知識人というイメージが付きやすいという雰囲気最近の日本にはあるように類推される。当然、このような外来語増加の現象は年の老いたものには、理解し難いものになると考えられる。また、単純な外来語とは言えないものも多い。クールビズなどは、cool と business を融合させたもので、ほぼ和製英語と言えるものであることから英語が堪能であれば、全て聞き取れるというものでもないのである。このような傾向は増え続ける一方であり、言語の複雑化を引き起こしているように見える。よって、本稿ではこのような傾向を見せる外来語について分析を試みようと思う。

外来語の研究については様々なものが存在する。肖冰 (2015) <sup>2)</sup> は、現代日本語では和語、漢語が存在するにも関わらず、類義語として外来語が存在しており、その使い分けの難しさについて述べている。上記で述べたように、人によって違ってしまうとこのような結論に至るのは至極当然のことと言わざるを得ない。また、飯田・中村 (1994) <sup>3)</sup> は、人によって書き方の違いのある外来語の変形ルールを探し出し、辞書に掲載する表記の揺れを少なくする方法を模索している。和語や漢語のように一定の形を有していない外来語の特徴を分析している。また、松崎 (1993) <sup>4)</sup> も似たような研究を行っており、多くの使用例から

2) 肖冰 (2015) 「外来語サ変動詞の意味記述」『日本語と日本語教育』慶応義塾大学日本・日本文化教育センター、pp.83-84.

3) 飯田敏幸・中村行宏 (1994) 「変形ルールと禁則ルールを用いた片仮名の表記ゆらぎの解消法」『自然言語処理』NTTコミュニケーション科学研究所、pp.2276-2282.

4) 松崎寛 (1993) 「外来語音の表記のゆれに関する定量的研究」『東北大学文学部日本語学科論集』東北大

多用されるものを基準として、一定の基準を設ける試みを行っている。このように類義語としても多用され、一定の形を持たない外来語の難解さを分析する研究は数多く行われている。

本稿ではこれらの外来語の研究に対し、問題の原点に立ち返ることを目的とし、現在進行中の外来語の増加についての動向を分析する。また、そのような傾向が起こる原因の追求を試みるものである。

## 2. 日本語におけるの外来語

日本固有の文字ではない語彙のうち、漢語を除いたものを外来語という。そのほとんどは欧米からのものであり、中でも英国、米国からのものが圧倒的に多い。外来語は「洋語」と表記されることもある。欧米系の外来語の中で、初期のものは宣教師が日本にやってきた室町時代後期、戦国時代に伝わったとされる。当然のこととして、宣教師が伝えたものが多かったために、宗教的な語彙である耶蘇（ヤソ）、伴天連（バテレン）などから、彼らが伝えたパン、タバコ（煙草）、家主貞良（かすていら・カステラ・加須底羅など）、金米糖（コンペイトー）、歌留多（カルタ）<sup>5)</sup>などの南蛮貿易で扱われた品名なども国内に入ってきた。但し、火縄銃はポルトガルの船舶が日本の種子島に漂着し、彼らから買い取ることで日本に銃が伝わったが、その名称はそのまの形で外来語として定着せず、日本に漂着したその島の名を取り、種子島という名称で全国に広がっている。このように品物自体は舶来品でありながら、名称自体は日本名が付けられるというものもあった。時代が下り、江戸時代になると当時の幕府は鎖国していたが、オランダとだけは交易があったために、オランダの先進文物である蘭学から始まり、品物まで輸入され、ビール、ゴム、メス、ガラスなどの語彙がオランダから入ってきた。江戸時代の末期に至っては、英語、フランス語などの語句も流入しはじめ、明治時代に入ると、封建制度から脱却するためにドイツの先進的な政治を学ぶという時代背景からドイツ語、イタリア語なども入ってきた。ドイツ語での例を挙げると、カルテ、ワクチンなどの医学用語や、哲学で度々見かけるアウフヘー

学文学部日本語学科、pp.83-94.

5) 語源はポルトガル語だが、同様の遊戯は日本とポルトガルとの接触前からあったものと考えられている。元々は、平安時代の二枚貝の貝殻をあわせる遊び「貝覆い（貝合せ）」である。これとヨーロッパ由来のカードゲームが融合し、元禄時代頃に今日の遊び方となった。

「ウイキペディア」<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%8B%E3%82%8B%E3%81%9F>（閲覧日：2018年3月25日）

ベン（止揚）、スキー場で頻繁に使用されるゲレンデという語句や、登山などに使用されるピッケルなどもドイツ語である。現在でも使用される語句であるが、時代によって日本語化する国の言語の種類が変わるといのが外来語の特徴である。現在において英語以外の外来語は専門的な意味を示すものが多い反面、英語の由来のものは一般的に使用されるものが多い。このような性質から現代の日本語において外来語は、英語からのものが大部分となっている。現在の日本語において外来語の占める割合は徐々に高まりつつあるが、どのような言語であれ、他文化から文化なり技術なりの流入があるのならば、外来語が増加するのは避けられない状況である。

## 2.1 発音の変化

外来語が日本に流入するに当って、外来語の持つ発音そのままに入ってくるということはまずありえない。様々な形で日本語化が進むのが自然である。まず、口腔の使い方の違う外来語の発音を日本人ができるはずもなく、日本語の発音の体系に合わせて変形される。つまり、外国語の正式な発音からカタカナ発音に変換される過程が存在することを意味する。但し、当然のこととして、この場合にも弊害はある。もともと日本に存在しなかった発音を日本語表記にするため、様々なパターンができてしまうことである。例を挙げると、「violin」はバイオリン、もしくはヴァイオリンであり、表記が割れてしまうという現象である。これ以外にも、ローマ神話の愛と美の女神である「Venus」はビーナス、またはヴィーナス、ウェヌスと表記が3種にも割れてしまう。これら以外にも「Telephone」はテレホンとテレフォン、「platform」はプラットホーム、もしくはプラットフォームとなり、一定していない。このような発音の揺れとも言える現象を防ぐための活動も行われている。一般財団法人テクニカルコミュニケーション協会<sup>6)</sup>では、「外来語（カタカナ）表記ガイドライン」を刊行し、上記のような揺れを防ごうとしている。このなかで、先ほどの「ヴ」の発音に関しては、「固有名詞を除き、V音に「ヴ」を充てるのは、近年ほとんど見られない。そのことは、TC協会が実施したアンケートで登場した canvas、telephone service、version など V音を含む語に対するカタカナ表記が、調査したすべての辞書、用語集等において「バ、ビ、ブ、べ、ボ」が使用されていたことからわかる。もはや「ヴ」は通常文では使用されなくなった

6) 製品やサービスの使用説明の品質向上によって誰もが安全かつ簡単に最新の技術を利用ことができ、仕事や生活の質を高めることができる社会の実現を目指している団体である。この作業の中で下位組織であるカタカナ表記検討ワーキンググループ（WG）は、使用者が直接見聞きする商品上に表記される外来語（カタカナ）の表記の統一のための調査検討を行ってきた。つまり、製品なり、サービスを提供するのにあたり、企業ごとに語彙の差が生じるのを防ぐために、企業が集まり規範となる外来語の制定を目指している。

と考えた」7)としているが、実際にはメディアに利用される「ヴ」の頻度の多さから、使用しないと確定的に扱ってもよいものか、些か疑問が残る。「里咲りさのZepp DiverCity(TOKYO)ワンマンライブが「伝説」になった理由」8)では、ライブではなく、「ライブ」と表記している。一般財団法人テクニカルコミュニケーター協会のような団体が精力的に活動しているが、未だ揺れは続いていると見るべきであろう。

## 2.2 形態の変化

その次に行われるのが、形の変更である。表記の揺れの場合は、外来語を日本語として正確に書けないために生じる現象であるが、敢えてその形を変化させてしまう場合がある。外来語は語形が長くなりやすいという特徴があり、そのためか日本語する場合に略語化されることが多々ある。例えば、「building」はビルディングからビルに、「strike」はストライキからストに、普段の生活で頻繁に使われるパーマは、もともとパーマネントウェーブ(permanent wave)を省略し、作られたものである。また、歌の出だしの部分はイントロダクションと言うが、ほとんどの人はイントロと省略形で使用し、パンフレットもパンフという形で使用することの方が多い。パーソナルコンピューター(パソコン)、イメージチェンジ(イメチェン)、スタートメンバー(スタメン)などなど例を挙げれば、簡略化して使用される外来語は枚挙に暇がない。いわゆる和製英語化とも言える現象であるが、これは英語を基準として捉えた場合、日本語として認めれず、日本語として研究の対象とならないという意見も存在する9)。

## 2.3 外来語の文法的特徴

次は外来語の文法的な特徴を考察しよう。外来語はもともと動詞であったものが、日本語化する過程で名詞になってしまうことがほとんどである。それが最も顕著に現れているものに「sign」がある。英語ではこれは動詞であり、意味は「署名する」という意味を持つ。しかし、日本人はこれをサインと表記し、動詞化する際には、「サインする」という用法を用いる。もともとの言語からすると「する」が2重に重なっているのだが、日本人の感覚からすればサ変名詞に「する」を付けただけである。これ以外にも「ski」がスキーという名

7) カタカナ表記検討ワーキンググループ(2015)『外来語(カタカナ)表記ガイドライン第3版』一般財団法人テクニカルコミュニケーター協会、p.15.

8) 「里咲りさのZepp DiverCity(TOKYO)ワンマンライブが「伝説」になった理由」ヤフーニュース：  
<https://news.yahoo.co.jp/byline/munekataakimasa/20171004-00076351/>  
 (閲覧日:2018年4月3日)

9) 田辺洋二(1989)「和製英語の形態分類」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』早稲田大学、p.1.

詞で使われており、「スキーしに行かない？」というように「する」をつけて使用することから、動詞としての様相は消え去っている。クレーム (claim) も complaint の意味で日本人は多用する傾向のある語句であるが、本来は動詞で要求する、主張するの意で使用し、名詞では要求、請求の意味として使われる。また日本人が英単語のスペル (spelling) という表現をするが、もともとこの単語も名詞として使用される際には、呪文、魔法、魔力の意味であり、一致してはいない。逆に名詞が動詞のように使用される例もある。「授業をサボる」のサボるは普通に日本語だと考えている日本人も多いが、実はフランス語であり名詞のサボタージュ (sabotage) がサボ (sabot) と省略され、「る」をつけることで動詞化している。名詞・動詞以外でも、このような傾向が見え、形容詞だとカンニング (cheating) も該当する。日本でカンニングとは試験を実力で受けず、答えをあらゆる方法で探すことを言うが、もともとは形容詞ではずい、悪賢いと言う意味で使用し、名詞では悪知恵、ずるさという意味になる。これに関しては心情的に理解はできるが、どうしても使い方に差異があるように思われる。英語圏の外人が日本語を学ぶのに当って、どれほど不思議なことであろうか。品詞が変わってしまっているのである。このように「外来語は必ずしも元の語と同じ意味や語感を持つとは限らない。むしろ異なるのが通常である」<sup>10)</sup>とする意見もあるほどなのである。このような傾向は、一般の生活に浸透し、日本語化した外来語に精通すればするほど、英語を勉強する者にとっては、邪魔になるしかないと思われる。

## 2.4 和製英語の発達

上記のような場合は、元々の意味が消え去ったり、変更されてしまった例である。しかし、これら以外にも英語の意味を持たないカタカナ語は存在する。和製英語である。もともと英語圏に存在しなかった語句を日本で作成したものや、原語の形を変更してしまったものである。和製英語も世間一般で幅広く作られており、もともとが英語なのか、和製英語なのか気付かないで使用してしまっているものも多い。代表的なものとして有名なのは、「コンビニ」であろう。日本人に何の略なのか尋ねると自信満々に「コンビニエンスストア」の略だと説明する人が多いが、実際にアメリカ人は生活の中で、表現としては存在するがあまり使用しない。地域によって呼称は様々なものがあり、代表的なものとしては、「drug store、pharmacy、corner store、party store、deli、bodega」などと表現する。また、日本では女性の事務職のことを度々、オフィスレディー (OL) などと呼ぶが、英語では

10) 大谷加代子 (2007) 「美容用語に見る外来語の研究 1」『山野研究紀要』第15号、山野美容芸術短期大学、p.9.

「office lady」などという語句自体を使用してはいない。男女の関係なしに「office worker」としている。事務室で仕事する人の意である。他にもよく見かけるもので、アフターサービスもある。当然、アフターとサービスを掛け合わせたものであるが、英語にこのような表現は存在しない。この言葉を知らなくても、漠然と購入後に行われるサービスという意味程度には推測できる。しかし、実際には英語で「customer service、customer support、customer care」と言い、顧客のサポートの意味で使用されている。ガードマンも「guard」と「man」を合わせたもので、そのまま英語にありそうな感じがするが、実際には存在せず、英語では単純に「guard」もしくは、「security guard」として使用している。コンピューターにおいて、バージョンアップという表現もしばしば散見される用語であるが、実際には「update」である。また、しばしば何かの準備を始める際に、「ウォーミングアップしておけ」などと言うが、英語圏では「warm-up (ウォームアップ)」であり、どうい理由なのかは分からないが、「ing」が付いてしまった例である。これら以外にも様々なものがある。最も重要な要素という意味で使用されるエキスはもと「extract」である。これは短縮されてしまった例であり、あまりにも生活に密着していて気付かないものに、エアコン、パソコンがある。もともとは、「Personal computer」「air conditioner」であったものを短縮して、完全な和製英語として作り上げてしまったものである。外来語の品詞の変化などはそれでも違和感を覚えながらも元々の原語に気付くことはできるが、和製英語の場合は変化の程度が非常に大きく、完全に他言語化してしまったと言える。

## 2.5 略字によるアルファベット表記

最近ではアルファベットで表示される語句が目につくようになった。アルファベット用語を外来語で扱うのか、議論の余地があるだろうが、外来語から由来するものが多い以上、便宜的にも外来語の項で扱う。一昔前までは堅苦しい漢字語の羅列であったものが、最近では新聞や雑誌などでアルファベット表記が増えつつある。例を挙げれば、GDP、CEO、IMF、EPA、NPO、QC、TPP、WTO、探せば枚挙に暇がない。これらの表現は語彙の意味を知らなければ、当然のこととして文章を読み解く上で障害となる。また、ここ数年、アルファベット表記の企業の名前が増えつつある。最も有名で古くからあったものはNHK<sup>11)</sup>であろう。上場企業の会社を調べてみると、JBCC、OSJB、ICDA、JXTGなどのアルファベット名の企業が顔を出す。何かのパスワードのようだという人もい

11) NHKの場合、英語の略字ではなく、Nippon Hoso kyokaiの頭文字を取って表現されているので、基が英語というわけではない。

るだろう。では何故このような会社名が増え続けているのか。林一は次のように述べている。

漢字はその字義が持つ特定性、拘束性、呪縛が決定的に敬遠されているのである。また、ひらがなの持つ古き良き伝統、文化、ゆったり、優しさのイメージが敬遠されるのは言うまでもない。このように考えれば、国際化の時代、国際化を前提とした時代を生き延びなければならぬ企業が、その旗印（会社名）として国際性、新しさ、シャープさ、無機質性のイメージを持つカタカナを施行するのは自然な流れかもしれない<sup>12)</sup>。

上記では、漢字・平仮名を捨て、カタカナ表記にした理由について述べたものだが、アルファベット表記にしていることとの理由の差はあまりないであろう。寧ろ、今ではカタカナよりもアルファベットの方が洗練されたイメージを持つことから、上記の言を肯定するものである。このような現象は、詰まるところ、漢字が持つ伝統＝古めかしさとなっていることを証明しているのである。現代は、急速に変化を続けている。その速度に歩調を合わせるのに当って、漢字で表現してはイメージが伝わりきれないということであろう。国際化が叫ばれて久しいが、会社のアルファベットを利用した名称からもグローバル化が進んでいると考えられる。

本章では、外来語の概略を述べた。現在の外来語は基本的に英語圏のものが多く、流れとしては、元々の原語の意味や形態よりも日本語化が進み、ほぼ日本語として見るのが望ましいと判断できた。また、カタカナ語表記よりもアルファベット表記が増え続けている状況であった。次章では外来語の日本での浸透程度を見ようと思う。

### 3. 外来語の日本語における分布

次に外来語の日本語における分布についてみる。宮島達夫は外来語の分布に関して次のような統計を出した<sup>13)</sup>。名詞について分類したのだが、「抽象的關係」「人間活動の主体」「人間活動」「生産物および用具」「自然物および自然現象」と分けた場合、「生産物および用具」において和語、漢語、外来語、混種語の比率が、外来語の場合 20% 近くなるというものであった。他の部門では、外来語の比率が 2～3% にしかならないにも関わらずである。この「生産物および用具」の中の外来語で最も多く登場した分野を以下に示す。

12) 林一 (2006) 「表記から見た日本の会社名 (続)」『国際研究論叢』第19号、大阪国際大学、p.127.

13) 宮島達夫 (1980) 「意味分野と語種」『国立国語研究所学術情報リポジトリ』国立国語研究所、pp.5-7.

表1 「生産物および用具」に見る分野別占有率

分野の種類	割合	例
衣服	29.6 %	スカート、ブラウス、ポケット
機械	29.3 %	カメラ、テレビ、ラジオ、バス
資材	21.0 %	ボタン、ガラス、ゴム
食糧	20.8 %	バター、コーヒー、タバコ
人物	14.5 %	スター、プロ、ベテラン

この結果は項目を見れば一目瞭然だが、和語のように過去から使用し続けてきた語彙と違い、外来語という特性上、物資の流入とともに言語まで入ってくるという現象によるものと言える。序論でも述べた通り、現在においては抽象的なことから表す外来語も非常に多く使用されるに至っているが、人工物の場合、いちいち日本語化しないで、そのままの形で流入するためにカタカナで表記する外来語が新しく生ずるということであろう。

外来語の場合、漢語や和語とは違い大きな欠点を持つ。新造語のようなものが多いため、日本の全ての世代に行き届いていない可能性があるということである。やはり新しい文物に熟れ親しみやすい若い世代は外来語の取り入れが比較的早いのが、高齢の世代になってくるとそう簡単にもいかないという実情がある。では、外来語が日本語として受け入れられる状況とはどのようなものであろうか。状況は3つに分けられるという。

1. それまでになかった事物や概念を取り入れたもの。これらは語彙体系の中の空所を埋める。  
例：インターネット、コンビニエンスストア、ラッキーセブン
  2. 新しさを積極的に打ち出すために取り入れたもの。これらは新鮮な感じを出すための文体的な差を積極的に生かして使っている。語彙体系の中に、ほぼ同じ意味の類義語があるため、新規さが際立つ。  
例：ショッピング、リビングルーム、ストラテジー
  3. 独自の用法として差別化する必要から取り入れられたもの。これらの語には語彙体系をより詳細にして、表現の幅を広げる効果がある。  
例：サポーター（ファンとの差別化）、イリュージョン（マジックとの差別化）<sup>14)</sup>
- 上記のような理由から外来語が日本語化していくということである。1はこれまで存在しな

14) 文化庁編 (2006) 『外来語と現代社会』 (新「ことば」シリーズ19) 国立国語研究所, p.79.

かった概念やものを取り入れるために外来語として受け入れ、2 は目新しさを強調するためであり、3 は似たような外来語が存在していたが、正確に区別するために取り入れてきたということであろう。外来語の流入の理由は上記のような経緯を辿るが、それでは外来語は全て同じような速度で日本語化されているのか。これについて考察したものがある。

【第一型】＝未処理の外来語　ユビキタス、インキュベーション、ニッチなど

【第二型】＝処理が進行中の外来語　ガーデニング、ケア、クッキングなど

【第三型】＝処理が終了している外来語　ラジオ、ノート、ボールなど

ご想像の通り、コミュニケーションにおいて問題を生じるのは日本語化が済んでいない外来語でなかでも第一型のものはほとんど生のまま日本語の中に投げ込まれた外国語である。私の調査では、外国語をカタカナ書きしただけで世間に投げ出す風潮が現れたのは、およそ一九七〇年代である。それは、外国映画のタイトルにおいてははっきりと観察できる。この風潮は衰えることなく今日に及んでおり、今では映画のタイトルだけでなく、ありとあらゆる外国語がカタカナ書きしただけで日本語に取り込まれている<sup>15)</sup>。

山田雄一郎は上記のように第一、二、三型として外来語を3種に区別している。結論として、外来語は流入してきてすぐに日本語化するのではなく、段階を経て日本語化するということである。第三型の場合は、完全に日本語化が済んでいる外来語であり、第二型は日本語化が進行中、第一型の場合は、英語をそのまま単純にカタカナにしただけであり、日本語化が進んでいない外来語を指している。つまり、英語の知識がない人には理解できない外来語という位置付けになるであろう。最近では「第一型」の外来語が増えつつある状況であるが、山田雄一郎はそれが1970年代から始まったとしている。「第一型」が大きく増え続け、「第二型」の処理が追い付かず、「第三型」にまで到達しないで消えていくものも生じている。このような結果から、例外も当然あることと思われるが、おおよそ外来語の習得率は学歴が大きな影響を与えるものと思われる。また、一概に外来語と言ってもその語句によって普及率に違いが現れるということも暗示していると言えるであろう。外来語は学歴、年齢、性別などによって普及率に偏りがあると言える。

#### 4. 複合語の中の外来語

15) 山田雄一郎 (2007) 「現代のコミュニケーションと外来語」『言語』第36巻6号、pp.24-25.

単独語は和語・漢語・外来語の基本的に3つの要素から成り立つが、複合語に視点を移すと、混種語と単種語に区別することができる。単種語とは「和語」「漢語」「外来語」の3種類の内、同じ種類の語種が2つ以上連結してできた単語を指すことばである。例を挙げよう。「和語」と「和語」なら、「ざる」と「そば」でざるそば、「漢語」と「漢語」なら、「警察」と「学校」で「警察学校」となる。最後に「外来語」と「外来語」であるが、「チョコレート」と「アイス」で「チョコレートアイス」となる。このように同じ品種の語句が重なり生じる単語は単種語と呼ばれている。単種語は以上の3種類となる。

次に複合語であるが、最近では外来語の増加などから、特異な混種語なども多い。例を挙げれば、2014年のノーベル物理学賞で一躍新聞の一面に踊り出た青色発光ダイオードのように「和語」+「漢語」+「外来語」のような3種が一つの単語として存在するものもあるのである。このように混種語は時代を色濃く反映することから単種語と違い、「各時代の社会の状況をかなり顕著に反映する」<sup>16)</sup>という意見もある。

では、具体的な混種語の構成を見よう。基本的には3種の語種の内、2種類の語種が合わさってきたものを混種語と呼ぶが、その構成は6つが考えられる。結合の位置によって、区別すると以下ようになる。

表2 混種語の種類

種類	例
和語 + 漢語	場所、場面、荷物、青写真
和語 + 外来語	紙コップ、牡蛎フライ
漢語 + 和語	台所、運動靴、半袖
漢語 + 外来語	新築マンション、格闘ゲーム
外来語 + 和語	スープ皿、ボール投げ、
外来語 + 漢語	コンピューター教室、サークル活動

上記のように分けられる。日常でよく見かけられる単語で構成されているが、我々は日常においてその区別・自覚なく、混種語を使用しているのである。基本的にはこのように6つ

16) 白井清子 (1990) 「混種語から見た各時代の造語の諸相」『学習院女子短期大学紀要』第28号、学習院女子短期大学、p.62.

に分けられるのが混種語とされている。

日本語の混種語は歴史的な経緯から和語と漢語、漢語と和語が多いと思われる。尤も和語と漢語の混種語は、日本語化が著しく進んでいるうえ、和語、漢語ともに漢字で表記される確率が非常に高いために、和語なのか、漢語なのかの判断が極めて難しくなっている。実際に漢字だけで表記された和語と漢語の混種語は、混種語と表現されるには既に一つの日本語の語句そのものという感さえ受ける。たとえば、両手・係員・石段・表門・背番号・桜前線・待合室・連絡先などは和語と漢語（順不同）の混種語だが、そう言われてすぐになるほどと頷ける日本人は、語学の専門家でもない限りそう多くはないであろう。その一方で、幕切れ・黒板消し・いちご白書・ゆとり教育・ともだち作戦・思いやり予算などのように、一目で和語と漢語（順不同）の混種語だとわかるものも当然ある。

次に外来語と和語、外来語と漢語の混種語（順不同）であるが、外来語の混種語は未だ和語と漢語の混種語に比べ量的には少ないものの、最近になって激増している。以下に例を挙げてみよう。

アパレル業界、景気ウォッチャー、インサイダー取引、就職シーズン、サービス残業、クーポン券、ショッピング街、缶コーヒー、健康ブーム、空きスペース、胃カメラ、インスタント食品、アレルギー反応、裏メニュー、減塩スープ、液晶パネル、エコ商品、エコ減税、オフライン作業、オフィス街、紙ロール、紙コップ、義理チョコ、環境ホルモン、原爆ドーム、グローバル化、コンピュータ言語、賞金ランク、省エネ、スポーツ飲料、製造コスト、パン屋、洗顔クリーム、操作ボタン、全米オープン、ハイブリッド車、太陽エネルギー、団塊ジュニア、脱サラ、プロ野球、ダンス音楽、タレント候補、テーブル掛け、テレビ番組、データ管理、デジタル放送、生ビール、二段ベッド、マイナス成長、電話インタビュー、ニュース速報、ネット事業、ネットカフェ難民、リンク集、ユーザー登録、不正アクセス、迷惑メール、ハーブ茶、脳トレ、ビニール袋、葉害エイズ、録画テープ、レジャー施設

上記のような例は、日常の生活の中において頻繁に耳にする語彙群であり、特殊な感じを受けるものもない。ほぼ一つの語彙として使用されているものばかりである。しかし、混種語の外来語の部分自体がネットカフェ難民、缶コーヒー、生ビールなどのように商品名のようにになっているものや、日本語に直しづらいプロ野球や健康ブームなどはある意味仕方のないことかも知れないが、コンピューター言語、インサイダー取引、賞金ランク、ショッピング街、オフィス街、空きスペース、インスタント食品などは、敢えて直せば、電子計算機言

語、内部者取引、賞金順位、商店街、商業地、空き地、若しくは空き空間、即席食品のように直せるのであり、インサイダー取引やショッピング街などは寧ろ意味が分かりやすくなり、外来語の使用を控えてもいいとさえ思われるものでもある。それにも関わらず、外来語を含んだ混種語は増え続けている状況であり、その使用が好まれる傾向にある。

上記でも述べたことだが、非英語系の外来語は英語を基にしたものに比べ少ない。よって当然のこととして非英語型の混種語はさらに少なくなる。よって、外来語を主とした混種語としては英語を基にしたものが多い。英語を基にした混種語は通常の場合、上記のようにカタカナと漢字で表記されることがほとんどであったが、新しい傾向としては、W杯、HIV感染、WEB制作、IT産業、MRI検査など、アルファベットと漢字の表記が徐々に増えつつある。注目に値する現象であると言えるであろう。MRI検査は、磁気共鳴断層撮影装置検査と、一般人に正確な意味は理解できずとも何となく言わんとしていることが分かる反面、長くて使用しにくいなどの問題からMRI検査で仕方ないと思われ、WEB製作も正確な日本語が存在しないので、そのままの使用が望ましいと思われる。IT産業の場合は、情報通信技術産業でも問題なく、両方とも使用可能だと思われる。但し、残りのW杯、HIV感染は今まで、ワールドカップ、エイズ感染と書かれてきたものであり、アルファベット使用の傾向を受けた表現、つまり洗練さを追求したものと言える。

また、上記では外来語に焦点を当てて見てきたが、付随する和語なり漢語なりに注目すると、新しい傾向が生まれている。最近の外来語の混種語には漢字を使用しない傾向のものがあり、すべてをカタカナだけで表記しようとするものがある。若者の間で頻繁に行われるブログなどで、その中だけで付き合いがある友だちのことをブロ友と言わず、「ブロとも」と表記する。これはブログ（外来語）と友達（和語）の混種語であるが、漢字を使わずにひらがなで「とも」と表記する部分において些か特殊な外来語との混種語であると言えるであろう。また、一昔前に一世を風靡した「アラフォー」（around 40、40歳前後の女性を表す表現）や「アラサー」（around 30、30歳前後の女性を表す表現）などはもとアラウンドとフォーティー、サーティーが英語なので単種語であるが、最近はこの表現から、派生した表現として、「アラカン」などというものもある。これは「around（外来語） 還暦（漢語）」（60歳前後の人々）を略して称しているのである。この場合は、「アラサー」や「アラフォー」のように接続される前の語句が両方とも外来語ではなく、外来語と漢語の混種語となるが、これに関してもアラ還とは書かず、アラカンとするのが一般的である。

混種語というものは、存在するほとんどのものがその時代を反映している新造語であると言える。過去に於いては、和語と漢語の新造語も当時において、現代の外来語のような最新

の受け取り方をされていたと考えられる。それまで存在しなかった概念が、品物であったり、文明、文化であったり、その経路は様々であるが、流入することによりそれらを表現するために、既存に存在した語彙と結合させることによって新しい語句の生成が必要になるのである。

英語である「globalization」は、外来語としてそのままの形として「グローバリゼーション」という形態で使用されることもあるが、日本語との組み合わせによって「グローバル化」というような混種語としての表現もある。又は、概念自体は取り入れても表現自体は外来語に依存せず、漢字に訳して「国際化」という表現を用い、表現されることもある。大概の場合はこの 3 つのうち、一つを選んで使用される。語句の理解しやすさから言えば、純粋な日本語に見える「国際化」が最も分かりやすいように思われ、その次に混種語である「グローバル化」である。グローバルの意味が分からなくても「〜化」とされていることから、何か変化しているという事実は分かり、文脈から読み解くこともある程度できるからである。最後に外来語そのままの形の「グローバリゼーション」で、これが一番分かり難く、分からなければお手上げであろう。このように海外で生まれた語句が日本語に流入するのに当り、様々な語彙の選択肢が増えるわけだが、最も外来語を分かりやすく表現するのが、和語、漢語との混種語であると言える。国際化などの漢語の使用が忌避されつつあり、また、意味の分かりづらい言語のままの外来語化が進む昨今において、外来語の混種語が占める重要性は過去にもまして上がっていると考えられる。

混種語とは、日本の土地柄に合わせて品種改良され、新たに産み出された生物のようなものである。昔からよく言われることであるが、雑種は生命力が強いのである。もともと日本に存在した言葉を駆逐、日々その数を増やししながら、日本語として定着しつつある。社会がその語を必要とする限りにおいて消え去ることはないように思われる。

## 5. 結び

本稿では日本語の中の外来語の位置付けを考察した。まず、時代によってオランダ、ドイツ、フランスなど、外来語の輸入先が変わっていったことを確認した。現在においては世界的な影響力、また外交・貿易の関係という日本との近さから、英語からの外来語が最も多い。外来語の表記に関しては、英語圏の発音をそのまま日本語で表示することができず、表記に揺れが生じてしまい、何通りもの表記が可能になっている現状を見た。この現象を抑えようとする動きはあるものの、一定の成果をみていない。また、これに止まらず、形

態を変えて和製英語化するものも多様に存在する。アルファベットで表現される英語は長くなるものが多く、表記するのが大変という理由から、略字化してしまう現象である。ここまで来ると、もともとの意味を探し出すのは難しくなる。そして、外来語は流入する際に、日本語にするともとの品詞に関係なく、ほぼ名詞として扱われる傾向があり、品詞の変更が行われる。よって、日本語の知識だけで英語に戻すと「～～するする」のように品詞が重複するような形になるものが増える。

原語から掛け離れた形態として存在する外来語であるが、それでもこれらは、原型を捜せば原語を見出すことができるが、日本で生産されたカタカナ語の場合、原語があるように見えても、日本で生成された為に当事国にはないという現象が起きる。このような場合には、いくらカタカナ語を知識として持っていたとしても、英語の実力にはまったく役に立たないということになる。つまり、形は英語のようだが、実際は純粋な日本語を覚えているようなものである。

次に注目したのは外来語の混種語である。外来語を和語なり、漢語なりと合わせ使用されるものであり、外来語の流入が増えている以上、混種語の数も増え続けている。また、最近ではアルファベットをそのままの形で残し、和語、漢語と接続させる特殊な混種語や、付属させる和語、漢語の形にこだわった混種語など過去に比べ、そのバリエーションが増えつつある状況である。

最近の英語をそのままカタカナ化した表現を多用する風潮は、インテリ、知識人のイメージを与えやすいという日本独特のものであり、英語ができない日本人の根底に広がる劣等感の現われのようにも見える。どのような国家であれ、他国との関わりを持つのであれば、文化や技術、製品などが流入するのは避けられない。よって、外来語が増えるのは仕方のないことであり、また、純粋な和語と漢語の表記が可能であるにも関わらず表記に古めたさを感じ、その使用を控えたいがために外来語を使用するのであれば、和語・漢語との混種語という形態をとることで、少しでも日本語らしさを残して欲しいものである。

## 【参考文献】

- 飯田敏幸・中村行宏 (1994) 「変形ルールと禁則ルールを用いた片仮名の表記ゆらぎの解消法」『自然言語処理』NTTコミュニケーション科学研究所、pp.2276-2282.
- 大谷加代子 (2007) 「美容用語に見る外来語の研究1」『山野研究紀要』第15号、山野美容芸術短期大学、p.9.
- カタカナ表記検討ワーキンググループ (2015) 『外来語 (カタカナ) 表記ガイドライン第3版』一般財団法人テクニカルコミュニケーター協会、p.15.

- 白井清子 (1990) 「混種語から見た各時代の造語の諸相」 『学習院女子短期大学紀要』 第 2 8 号、学習院女子短期大学、p.62.
- 肖冰 (2015) 「外来語サ変動詞の意味記述」 『日本語と日本語教育』 慶応義塾大学日本・日本文化教育センター、pp.83-84.
- 田辺洋二 (1989) 「和製英語の形態分類」 『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』 早稲田大学、p.1.
- 松崎寛 (1993) 「外来語音の表記のゆれに関する定量的研究」 『東北大学文学部日本語学科論集』 東北大学文学部日本語学科、pp.83-94.
- 林一 (2006) 「表記から見た日本の会社名 (続)」 『国際研究論叢』 第19号、大阪国際大学、p.127.
- 文化庁編 (2006) 『外来語と現代社会』 (新「ことば」シリーズ19) 国立国語研究所、p.79.
- 宮島達夫 (1980) 「意味分野と語種」 『国立国語研究所学術情報リポジトリ』 国立国語研究所、pp.5-7. (DOI:info:doi/10.15084/00001068)
- 山田雄一郎 (2007) 「現代のコミュニケーションと外来語」 『言語』 第36巻 6 号、pp.24-25.

#### インターネット資料

- 「ウイキペディア」: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%8B%E3%82%8B%E3%81%9F>  
(検索日: 2018.03.25)
- 「里咲りさのZepp DiverCity(TOKYO)ワンマンライブが「伝説」になった理由」 ヤフーニュース:  
<https://news.yahoo.co.jp/byline/munekataakimasa/20171004-00076351/> (検索日: 2018.04.03)

논문 투고 일자: 2019. 04. 14.
논문 심사 일자: 2019. 05. 03.
게재 확정 일자: 2019. 05. 07.

外来語の標準化に関する一考察  
-最近の外来語多用化の分析-

吳秀文

本稿はもとも外国の語彙であった外来語がカタカナ語として日本語化するのに当たり、どのような傾向を持って使用されているのか、分析を試みたものである。

現在の日本において外来語の増加は著しく、意味の分かりづらい文章が氾濫している。政治家の演説から書籍に至るまで、外来語が現われないことはまずない。このような現象は、国際化が進む現代において当然の結果だと言えるが、その速度があまりにも早く、ついていけない国民も当然のこととして存在し、特に年輩の者に多い。したがって、本稿ではカタカナ語がどのように生成され、どのように使用されているのか、その方向性を確認するとともに、幅広い世代に受け入れられることが可能な望ましいカタカナ語の形態を考察した。

A Study on the Standardization of Foreign Words  
-The Recent and Widespread Appropriation of Foreign Words-

Oh, Soo-Moon

This study attempts to analyze the characteristics of foreign, non-Japanese words that have been converted into Japanese as Katakana.

The recent increase of Katakana in Japan is remarkable, and the prevalence of sentences that are difficult to understand is surging. From political speeches to book-length publications, Katakana can be found everywhere, and it has become very unlikely to encounter text without Katakana. Such a phenomenon can be said to be a natural result of today's increasingly globalized world, but because the rate of globalization is so fast, there are people who cannot keep up with its effects, especially the elderly. Therefore, in this study we examine how katakana is created, how it is used, and its directionality, and we will also attempt to identify the traits of a desirable form of Katakana that can be accepted by a wide range of generations.